

・研修内容

【島前合宿】島根県隠岐郡島前地区で、まちづくり・教育の最先端を現場で学ぶ。

・高校生&大学生&島前地域 交流会

島前高校ヒトツナギ部員が地域の人と交流会を通じ、地域の人との関わりの重要性を学ぶ中で、大学生は「地域の特徴を捉える力」を磨く。

・西ノ島中学校出前授業

中学生の「質問する力」の向上と、大学を身近に捉えることで進路選択を考える機会をつくる。大学生は質問されることで、自分を見つめなおす機会にする。

・隠岐國学習センター夢ゼミ

高校生が「自分のやりたいこと」と「求められていること」の重なりを見つけ対話を通じて「他人がやりたいこと」を知り協働できる部分を探す。大学生は地域における学生の役割を自ら考え創り出すことを目指す。

・参加理由

今回この研修に参加した理由は、大きく分けると二点ある。

第一に、この現代福祉学部・福祉コミュニティ学科に入学し何を学ぼうか、考えるためである。福祉コミュニティ学科に入学し、これから福祉・地域づくりを学ぼうという中で、自身が学習したい方向性が明確になかった。そこで1年生の始めのうちに両領域を実際に現場で経験してみよう、と考えた。時を同じくし、この島前合宿の誘いを受け、まず地域系を学ぶことができる良い機会だと思い、今回の研修参加に至った。

第二に、自身の興味・関心を探求するためである。私は将来の夢・展望が今のところない。そこで今までと違う環境に自身を置くことで自分を見つめ直し、さまざまな人に会うことで新しい知見を広め、将来につなげられれば、と考えたためである。

・参加して

授業でまちづくりを学ぶことはあったが実際にどのように行われているのか、現場を見たことがなかったので具体的に想像ができなかった。しかし今回地域づくりの実際の現場に出たことで、生のまちづくりを体感することができた。また離島という特殊な環境の中で特色ある教育を学ぶことができた。

島前高校ヒトツナギ部との交流では、高校生が地域の方々と同じ机を囲み、議論し、ともにまちづくりを考える。そこでは責任の伴った議論が交わされていて、座学では決して学べない臨場感を学ぶことができた。また地域に暮らすそれぞれの人の思いが印象に残っている。ヒトツナギ部の高校生たちは地域に向き合い、課題を抱え苦心しながらも全国にも知れるような大きな取り組みをし、島を魅力化すべく奮闘している。とりわけ彼ら一人一人の島に対する思いは心に響くものがあり、地域の大人との関わりを通して島が好きになったというエピソードが今の彼らを動かす原動力になっていると思うと、心動かされた。

その思いに応えるように、地域の人々は高校生に島に暮らす大人の観点から具体的なアドバイスをしたり、助けになったり、またもっと自分たちを頼って良いと励ましたり。地域の大人たちが、親身になって高校生をサポートする姿勢は都会では見られないもので、島の人々の情の深さを感じた。その地域に暮らすからこそ、皆が一体となってまちづくりをしていくその縮図をこの場で見出だした。

西ノ島中学校の生徒たちとの出前授業では、異なる環境で生まれ育った中学生たちと身近に会話できたことが新鮮だった。フォーマルな会話というよりは、普段どのような暮らしをしているのか、どのような学校生活を送っているのか、どのような将来の展望を抱いているのか、など各個人にせまる会話ができて自分との比較ができたことが良かった。また質問されることで忘れていた経歴を思い出すなど、自分を顧みることができたのも良かった。

隠岐國学習センター夢ゼミでは、学校の先生とはまた異なる、さまざまな分野で活躍している大人の話を引きけることはいい機会だと感じた。私も高校生に混ざり隠岐國学習センター長豊田さんの話をきいていたが、豊田さんのキャリアを交えて地域貢献のコツを語る内容に、思わず自分も高校生のときにこんな場があれば良かった、と思った。相手の本質・ニーズを捉え、自分と相手の交わりを探し、信頼を獲得しながら自分の求めることと周りのニーズを近づけてゆく。その際「自分のやりたいこと」が強く「周りが求めていること」を軽視してしまうことに注意である、という話は心に留めておこうと思った。大学生でさえ身になる内容なのだから、高校生の時点できけるというのは非常に恵まれた環境であると思う。さらに、島外の生徒も多いと言うこともあり、十人十色な高校生たちと切磋琢磨できる環境もまた恵まれている。私自身もそんな個性豊かな高校生たちと交流することで、コミュニケーション能力の向上が図れた。

・反省点

実際の現場に入ることが初めてということもあり、とても緊張した。合宿を通して、意見を求められることが多々あったが、なかなかうまく伝えられず、意見を思いつくこと自体が難しかった。これは、自分が日頃意見を持つことを怠っているからである。自分には関係のないことだから、と常に自分と周りに線引きをしてしまうことが、考えることを怠ってしまう背景だろう。意見感想を求められるから、と考えるのではなく、常に自分の意見・考えをもつことができるようになりたい。そのために、自分には引き出しが足りないと感じた。特に中高生に大学を身近に感じてもらうという一環で、話したり、相談をうけたりすることもあったが、うまく相手が求めているような答えを返してあげられなかったと思う。勉強ももちろんだが、今回のように実際のフィールドにでてさまざまな経験をし、さまざまな人に出会うことで見識を広めることで、人間としての深みを増してゆきたい。

・今後について

合宿参加理由に現場経験を通して今後この学科で学びたいことを決定する、自分の興味

関心事を探求する、があった。

まず一つ目の学びたいことの追求だが、これは上述した通り今回の地域分野だけでなく福祉分野も実際に現場で経験してから決定したいと考えている。しかし進路選択はさておき、今まで授業上の問題としか捉えられなかった地域問題を実際にフィールドに出て自分の肌身で感じられたことはとても大きな学びとなった。豊かな自然、多様な人との出会い、島前の人々の思いやり・温かさ、またそれらすべてに感謝する心、大学を越えたこの先の人生に実りある経験になったということは自信をもって言うことができる。今後いかなる将来を歩んだとしても、この合宿は自分の身になるだろう。

二つ目の興味・関心事の探求だがこちらは収穫があった。4泊5日の合宿では、中高生と関わる機会が多かった。その中で自分は中高生と話すことが好きだということを改めて、はっきりと認識した。私自身、中学高校時代では一貫校という背景もあり、年代の幅広い年下と関わるが多かった。したがって後輩と話すことは以前から好きではあったのだが、「好き」をはっきりと自覚することはなかった。だが西ノ島中学校での中学生との交流、夢ゼミでの高校生との会話は特にその「好き」を意識させられた。ある程度成長した年齢である中高生との会話は、幼すぎず大人びず、純粹であり話していて楽しい。あくまで「楽しいから好き」というだけで、例えば教師などの職につなげたいかと言えばそうではないが、今までまったく手がかりがなかった中で、自身の将来選択につながりそうなものを見つけられたことはよかった。そういった面でも、さまざまな人との出会いが良い刺激になった。

今回の合宿を通してさまざまな人にお世話になった。大学生側の目的としては、中高生のサポートだったが逆にこちらが勉強になることも多かった。お世話になった方々への感謝を込め、今回の経験を大学生生活ひいては人生で活かしてゆきたい。